



篠山市立中央図書館地域資料の整理に向けて : 地域資料整理サポーター結成と活動(フィールドリポート3)

井上, 勝盛

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 6:106-114

(Issue Date)

2014-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008708>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008708>



Reports 3 from the Field

篠山市立中央図書館地域資料の整理に向けて

——地域資料整理サポーター結成と活動——

井上 勝盛

はじめに

篠山市は、兵庫県の中東部に位置し、京都府境に接する。古くから山陰道の要衝にあつた篠山は、幾多の歴史に彩られ、また、地理的に京都に近いこともあつて、様々な文化・伝統が息づき今に伝わっている。慶長一四年（一六〇九）徳川家康の命により篠山城が築城され、五万石の城下町として丹波地方の政治経済文化の拠点となり栄えてきた。標高二〇〇メートルの篠山盆地を有する典型的な内陸盆地にあり、気候は四方を山に囲まれた盆地特有の気候を成し、秋から冬にかけて濃霧の発生を見ることができ、市の産業は伝統的に水稻をはじめとする農業が中心であるが、全国的な知名度を得ている「丹波篠山黒豆」、「丹波篠山黒枝豆」、「丹波篠山山の

芋」、「丹波茶」、「丹波栗」、「丹波松茸」、「丹波篠山牛」、「猪肉（ぼたん鍋）」、「丹波木綿」、「丹波焼」などといった「丹波篠山」ブランドを象徴する特産品が多くある。

平成一一年度多紀郡四町合併により篠山市は誕生した。その四年後の平成一五年度に丹波篠山への観光入口である丹波山口インターチェンジ近くに、高さ二五メートルもある時計塔を擁する赤煉瓦造りの「篠山市立中央図書館」（篠山市西吹）が新設開館された。同時に、本庁近くの篠山市民センター内に図書コーナー（篠山市黒岡）が開設され、ここに七〇余年の歴史と伝統をもつ篠山市立本郷図書館の機能は移転整備された。開館以来、多くの利用者からの多様なニーズに応えながら図書館運営に努めている。しかし、社会経済情勢の大きな変化の中で、篠山市においても非常に厳しい財政が続いている。平成二一年度に篠山市民センター図書コー

ナーから基本的に図書館職員は撤収し、ボランティアによる図書館運営に切り替わるなど、様々な課題に直面し、その対応が求められてきた。また、図書館の持つ新しい可能性も議論追求されはじめ、市民要望は年々高まっている。これらの実現のため、効果的な施策展開がより一層求められるようになった。

そこで、開館一〇周年を迎える平成二四年度に「篠山市立図書館ビジョン」を策定し、現状を見据え、篠山市の図書館が目指す将来像を描き、その実現のための各事業施策を定めた。ここに、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター（以下、神戸大学と記す）と連携事業を推進し、図書館が所蔵する地域資料を適切に整理保存活用することを掲げた。

本稿では、神戸大学と篠山市立中央図書館の連携が始まった平成二三年度から平成二五年度までの三年間における、篠山市立中央図書館地域資料の整理に向けての取り組みについて報告する。

一 未整理地域資料の問題

現在、図書館には約一八万冊の蔵書があり、そのうちの古文書をはじめとした一、〇〇〇点以上が手付かずのまま未登録の状態である。職員自身で登録できれば良いのだが、こ

で立ちはだかったのが文字による壁であった。古文書はくずし字で書かれているため、学習を積んでいないと読むことができない。習得するには三〜五年はかかると言われていた。そのようなところが原因となり、職員では登録ができず倉庫に保管してきたという実情があった。これが、中央図書館における未整理地域資料の問題である。

二 平成二三年度

（一）神戸大学との始まり

平成二三年九月五日に神戸大学篠山フィールドステーション（以下、篠山フィールドステーションと記す）にて、「江戸時代の丹波茶——日置地区中西家文書の世界——」と題し、オープンセミナーが開かれた。これは、篠山市日置地区で発見された中西家文書を使い、江戸時代の丹波茶についての講演であった。丹波茶の歴史は平安時代に現れるほど古くからある。

オープンセミナー終了後、図書館アドバイザーから、その場にいた神戸大学関係者に図書館が保管する貴重な郷土資料の存在について持ち掛けた。この時、大学側は平成二三年度夏期篠山市古文書合宿であったこともあり、翌日の六日には中央図書館にて保管する楽翁文書などの現物確認を行った。

このようにして、ここから、まず未整理地域資料の問題は図書館、大学の連携により解決に向けてスタートした。

(二) 次年度に向けて講座開催決定

その後、平成二三年一月二二日及び平成二四年三月一三日に神戸大学にて、大学関係者及び篠山フィードバックコーディネーターと協議を重ねた。その結果、平成二四年度は「まちづくり地域歴史遺産活用講座」と「地域資料整理サポーター養成講座」を篠山の地で開催することが決定された。

各講座を通して今後のリーダーとなる人材育成を図るとともに、地域資料に関わる方との人的ネットワークを構築していくことも確認し合った。また、神戸大学にて現在調査中の中西家文書が一区切りした段階で図書館に保管し、学術成果と合わせた連携型の活用方策を検討していくことも提案された。更にこの時、地域資料の拠点である公共図書館を利用した篠山市史編纂となれば、兵庫県のなかでも持続可能で新しい取り組みとなることなど、ここからの図書館が持つ新たな可能性についても話題議論された。

三 平成二四年度

(一) 講座開催

① 講座打ち合わせ

平成二四年六月二六日に中央図書館にて、神戸大学と今年度開催する二本立て講座について協議を持ち、講座実施は大学で行い、広報や募集は中央図書館で行う役割分担を決めた。

② 古文書入門講座受講

古文書を扱う以上は古文書を知る必要がある。篠山市中央公民館では古文書入門講座が月曜日に開催されている。この講座は旧篠山町時代から二〇年以上続く定員五〇人の講座である。幸い図書館の休館日が月曜日であるため、個人参加として受講することができた。分かったことは、初心者にとつて古文書解読は難解なこと、人権意識を持つことなどである。その後、この講座を受講した経験が古文書関係者とのネットワークや広報活動などにも役立つといった。

③ 広報活動

四つの広報活動を行った。第一に、広報紙「丹波篠山」に各講座開催時期に合わせて受講者募集を掲載した。第二に、中央図書館、市民センター図書コーナーなどに各講座開催時期に合わせて募集ちらしを配置した。第三に、「古文書入門講座」と古文書サークル「古文書の会」にて、これから図書館が取り組む未整理地域資料の整理について事業説明を行っ

た。併せて、今年度実施する二本立て講座のPR活動を行い、参加者を募った。第四に、平成二四年十一月一〇日に神戸新聞にて、「貴重な古文書次世代へ——データベース化着手——」と題し、新たな図書館の取り組みと各講座について紹介した。

④まちづくり地域歴史遺産活用講座開催

平成二四年二月一日～二日にかけ中央図書館にて、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」を開催した。近年各地で、地域歴史遺産を活用したまちづくりの取り組みが、住民自身の手で行われている。この講座は、こうした取り組みに関心を持つ市民に向けて、地域の歴史についての活用方法や見方を学ぶ講座である。神戸大学大学院人文学研究科講師陣により、地域歴史遺産とまちづくり、歴史資料取り扱いの基礎、地域歴史遺産活用事例の紹介、災害から地域資料を守る、地域の歴史の見方（近代・古代・中世・近世）について講義が行われた。受講者二五名のアンケート結果から、特に好評を得たのは「篠山に関する話題は身近なものとして興味深く聴けた」、「災害資料に対する応急措置の実技指導は為になった」というコメントであった。これを受け、地域資料整理サポーター養成講座の文書カード作成では、これらの要素を取り入れた内容とした。

⑤地域資料整理サポーター養成講座開催

平成二五年二月三日～二四日にかけ中央図書館にて、「地域資料整理サポーター養成講座」を開催した。この講座は、平成二五年度地域資料整理サポーター結成活動を想定した実践的内容とした。講義内容は、古文書整理五つの原則、整理の手順、文書カードの作成、目録の作成、古文書解読の基礎を柱立てとした。特に、文書カード作成には大幅な時間を割り当て、図書館が保管する古文書を演習課題とし、実践さながらの演習と実技指導を行った。アンケート結果からも、「地域資料整理サポーター活動における実際の作業が体験できたので、具体的に何をするのかよく分かった」、「有意義な楽しい時間だった」など好評を得た。参加者一七名のうち、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」の受講者も多くいた。

この時の様子は平成二四年二月二四日に神戸新聞にて、「歴史資料の整理重要——サポーター養成講座開催——」と題し、講座内容が掲載された。この記事では「過疎化などで地域文化を継承することが困難となり、資料の散逸が急速に進んでいる」と警鐘を鳴らした上で、「地域の歴史資料を整理して守る意義」が紹介された。

(二)「中西家文書の調査・研究に関する覚書」締結

①神戸大学中西家文書概要調査

中西家文書とは、篠山市日置地区にて中西家旧家宅工事中

において発見された、総概数五、〇〇〇点に及ぶ地域資料である。神戸大学では、これまで三回、中西家文書概要調査を実施し、平成二三年三月一日と平成二三年五月一七日は現地に調査を行い、平成二四年二月三日には篠山フィールドステーションにて中性紙保存箱への詰め替え作業を行っている。これら各三回の概要調査は、それぞれに報告書がまとめられている。同時に、大学研究室においても中西家文書のうち、古文書を中心にデジタル撮影やその簡易製本を終えている。

②夏期篠山市古文書合宿

中西家文書は、生きた教材として大学教育に使用されている。中西家文書概要調査を契機に、平成二三年度から毎年、篠山フィールドステーションにて開催されるようになったのが、夏期篠山市古文書合宿である。大学教員学生約四〇名が古文書解読や目録カード作成に挑み、スタートしてから三年間が経った現在では、目録カード作成など約二割を終えている。

③連携型活用方策を定めた覚書締結

平成二五年三月二六日に「中西家文書の調査・研究に関する覚書」を締結した。中西家文書を調査していた神戸大学では、第一に、平成二四年度で中西家文書概要調査が一区切りするため、第二に、今後も夏期篠山市古文書合宿を継続実施

するため、保管設備を有する適切な場所を必要としていた。そこで、図書館は篠山市民センター図書コーナーにある倉庫を保管場所として協力提供することを決め、平成二五年三月二六日に神戸大学は中西家文書を搬入した。今後、更なる中西家文書調査や夏期篠山市古文書合宿にて得られた解明成果は、図書館に情報提供されることが決まっている。このように、大学と図書館が相互に協力することにより中西家文書の調査研究を図ることにした。

四 平成二五年度

(一) 地域資料整理サポーター養成講座開催

平成二五年六月二日に中央図書館にて、昨年度二月に実施した「地域資料整理サポーター養成講座」を再度開催した。これは、再受講希望者がいたこと、サポーター結成活動を目前に更なる実践を積むこと、新規サポーター希望者を開拓することを目的とするものである。受講者九名のうち、全三講座受講者は数名いた。

(二) 地域資料整理サポーター結成と活動

ここから、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」の効果が



地域資料整理サポーター結成と活動（写真①）

表れ始めた。つまり、先述二（一）の図書館、大学の連携から図書館、大学、地域の連携へと発展し、「地域の歴史遺産を活用した市民参加型のまちづくり」が形成された。

平成二五年六月八日に地域資料整理サポーターを結成し、第一回活動を行った（写真①）。メンバーは一名で、かつて町史編纂資料整理に携わった方や中央図書館で活動する「古文書の会」のメンバーも多々いる。活動は六月から二月まで（八月を除く）中央図書館で月一回三時間行い、神戸大学に指導を仰いだ。活動目標として、楽翁文書全巻目録作成を掲げた。理由としては、第一に、この楽翁文書は、郷土史家奥田楽々斎氏によって収集された篠山地域の歴史を語る

うえで重要な地域資料である。第二に、篠山の歴史に関わるレファレンス（調査相談業務）は、この楽翁文書を手がかりにすることが多々ある。それだけ利用頻度が高く、館内閲覧希望者も多い。第三に、単なる楽翁文書リストがあるのみで、内容が十分ではなかった。そのため、楽翁文書から着手することにした。また、活動上の注意事項として、地域住民が地域資料

を扱うため知り得た情報は厳重に扱うようお願いした。

第一回活動から予想を超える目録カードが作成された。これは、第一に、多くのメンバーが集まったこと。第二に、養成講座を通過した方に限ったため、明確な意志を持ったサポーターが結集したこと。第三に、実際の活動を想定した演習を講座で繰り返し行ったことが考えられる。そこで、急遽、大学からサポースタッフ一名を増員し、第二回活動からはサポースタッフ二名で資料整理に当たった。しかし、これでも作成された目録カードを全てデータ入力することができなかった。こうした滞った状況をみて、個人の時間をさいて、作成された目録カードのデータ入力を買って出る方が現れたので進捗が図られた。この協力が一二月まで続いた結果、楽翁文書全五四巻、分冊にすると約四〇〇冊の目録カード作成とデータ化を終えることができた。これにより、早速、図書館サービスとして使える郷土資料目録として編集し、有効に活用している。更に内容を充実精査した上で、図書館システムに導入する。

（三）広報紙「丹波篠山」で活動紹介

広報紙「丹波篠山」平成二五年十一月号において、図書館が推進する地域歴史遺産を守る取り組み全般について特集を組んだ。ここでは、四ページにわたり郷土資料のデジタル化

や修繕なども紹介した。この中で、サポーター活動について掲載し、図書館、大学、地域が連携して、それぞれの役割を果たしながら共に活動する、まちづくりを本線とする点を強調した。また、サポーターの思いもコメントとして掲載した。この特集掲載により、活動において地域歴史遺産を守る機運が更に高まっていった。

(四) 「としょかんまつり」で活動紹介

広報紙による活動紹介に加え、さらにオープンな活動紹介を展開した。平成二五年一二月四日～一五日にかけ中央図書館にて「としょかんまつり」を開催し、図書館で活動するボランティア団体による読み聞かせや朗読体験のほか、中央図書館もクリスマス会や雑誌リサイクルフェアなどを実施した。この中で、見学を可能とする地域資料整理サポーター活動を行った。普段は閉ざされた視聴覚ホールで活動しているため、実際にどのような活動をしているのか知ることができないので、ドアをオープンにしたまま活動を行い気軽に見学ができるようにした。

(五) 地域連携フォーラムで活動報告発表

平成二六年一月二五日に丹波広域農業研修センター（篠山市大沢）にて、第八回篠山市神戸大学地域連携フォーラムが

開催された。ここで中央図書館は「地域資料整理サポーター結成と活動」と題し、サポーター結成と活動のほか、活動室開設や自主的活動開始、今後の展開などの報告発表を行った。この時の様子は、翌日の平成二六年一月二六日に神戸新聞にて紹介された。

(六) サポーター活動室開設と自主的活動開始

平成二六年二月九日にサポーター活動室開設と自主的活動を開始した（写真②）。ここから、先述四（二）の市民参加型から「地域の歴史遺産を活用した市民主体のまちづくり」に成長を遂げていく。

これには契機となった出来事があった。それは地域資料整理サポーター活動五回目の出



活動室開設と自主的活動開始（写真②）

来事で、急遽、神戸大学不在の中で活動することになった。予想通り活動開始からしばらくすると、目録カードの作成が進まなくなった。そこで、活動内容を変更し、館内の未整理地域資料を保管する場所を案内して周った。続けて、来年度開設に向けて準備

中の倉庫を利用した活動室も案内することができた。というのは長らくここに、耐震補強工事のため兵庫県立篠山鳳鳴高等学校が保管する青山文庫を仮置きしていたが、工事終了にあたり直前に撤収されたからできたことである。このように、貴重な未整理地域資料と活動室のお披露目により、これからの活動に関して様々な話題が交わされる中、中央図書館としては時期をみて活動室に多数保管されている未登録の旧丹南町史編纂資料を整理していくことを挙げた。これに対して、「何かお手伝いすることはありますか」とサポーターが応えた。この出来事を境にして、一気に自主的活動へ動き出した。

平成二五年一二月一四日に六回目最終活動において、中央図書館から、第一に、来年度を待たずしてサポーター活動室を開設すること、第二に、この活動室で自主的活動を開始すること、第三に、将来起きる篠山市史編纂事業を見据え、私たち作業チームとして、この目録作成に取り組んでいくことを発表した。調整の上、第一回自主的活動は平成二六年二月九日と決めた。そこで、急遽、庁舎にて未使用になっている長机や椅子、ノートパソコンやプリンターなどを寄せ集め、自主的活動ができる環境を整えた。

平成二六年二月九日にサポーター活動室にて、第一回自主的活動を実施した。これまではサポーターが大学に指導を受けていたが、これからはサポーターが自主的に図書館の整理

作業に当たっていく新しい局面に入った。第一回目は進め方などを決めるため、神戸大学の助言のもと活動を行った。自主的活動は、水曜日と日曜日とし、全体での活動を月一回設けた。また、活動日誌への記録や目録カード作成後の処理などについても説明を行った。この日以降、活動室ではサポーターが自主的に目録カード作成やエクセル入力を進めている。

五 神戸大学と篠山市の歴史は古い。昭和二四年から昭和四二年まで篠山市には、神戸大学農学部の前身である兵庫県立農科大学があった。この時期には地域と共に特産品の研究開発が行われ、現在、黒大豆や山の芋などの「丹波篠山」ブランド化の成功に至っている。その後、大学は篠山を離れたが、当時の地域に密着した関係を新たに紡ぎ直す機運が高まってきた。その手始めとして、平成一八年一月一〇日に多くの関係者参加のもと「神戸大学農学研究科篠山フィールドステーション」の開所式が行われた。そして、平成一九年四月五日に神戸大学は生きた実践フィールドを求め、篠山市は地域課題解決・地域活性化を求める内容の「神戸大学大学院農学研究科と篠山市との地域連携協力に関する協定書」を締結

神戸大学と篠山市の歴史は古い。昭和二四年から昭和四二年まで篠山市には、神戸大学農学部の前身である兵庫県立農科大学があった。この時期には地域と共に特産品の研究開発が行われ、現在、黒大豆や山の芋などの「丹波篠山」ブランド化の成功に至っている。その後、大学は篠山を離れたが、当時の地域に密着した関係を新たに紡ぎ直す機運が高まってきた。その手始めとして、平成一八年一月一〇日に多くの関係者参加のもと「神戸大学農学研究科篠山フィールドステーション」の開所式が行われた。そして、平成一九年四月五日に神戸大学は生きた実践フィールドを求め、篠山市は地域課題解決・地域活性化を求める内容の「神戸大学大学院農学研究科と篠山市との地域連携協力に関する協定書」を締結

した。更に、この農学研究科協定を拡大し、平成二二年八月三〇日には全学協定である「篠山市と国立大学法人神戸大学との連携協力に関する協定書」を締結した。これにより、多くの分野で地域連携が可能となった。同時に、「神戸大学篠山フィールドステーション」に改称した。この篠山フィールドステーションは、神戸大学地域連携研究員が常駐する地域連携拠点施設であり、ここでは、地域課題の相談窓口と大学全学部との関わりを併せ持ち、効果的な相互展開が始まる起点となっている。

図書館としても、未整理地域資料の問題についての相談や打ち合わせで使用したほか、先述三(二)①・②のとおり、神戸大学中西家文書概要調査や夏期篠山市古文書合宿においても、関わりがある場所である。更に、未整理地域資料の問題が解決に向かう契機になった神戸大学との始まりは、先述二(一)のとおり、この場所である。これに関することとして、篠山フィールドステーションは、『LINK』四号(二〇一二)掲載のフィールド・リポート「篠山に学びの場を再興する——神戸大学篠山フィールドステーションの取組——」において、「一番の仕事は、地域に関わりたい／大学に関わりたという気持ちを持つ方と出会い、つながることである」とされており、「出会い、つながること」を篠山フィールドステーションにおける重要な役割に挙げている。これにより、図書

館における地域連携も誕生した。これらに限らず、冒頭から述べてきたこと、どれ一つとつても、神戸大学全学協定と篠山フィールドステーションの効果である。

おわりに

地域資料は、篠山の歴史や文化、先人たちの暮らしを今に伝えてくれる。しかし近年、これらの貴重な資料の劣化や散逸が進んでいる。これらの資料が失われることは、すなわち地域の歴史が失われることである。地域資料は、このまちに住む私たちが守り活用していくものである。そして、次世代へと引き継いでいかなければならない。

今後とも神戸大学と連携を強め、図書館における地域資料の整理活用に取り組むとともに、将来起こる篠山市史編纂事業の備えとした考え方も取り入れながら、活発に活動を展開していきたい。また、私たちの活動が、市内全域に点在し眠る地域歴史遺産の掘り起こしや再認識のきっかけ作りになればとも考えている。

最後に、神戸大学には三年前の始まりから現在に至るまで、篠山市立中央図書館に対して深いご理解と多大なご協力をいただいたいている。ここに記して、神戸大学関係者全員に深く敬意と感謝を表する。